



さくら学園にもタイガーマスクのおじさんが来てくれました。何を届けてくれたかと言いますと、桜の苗木10本です。不思議なもので、この申し出が決定したのは、花卉園の第2園庭の改修工事をしようと考えていた矢先でした。申し出と工事計画がうまく符合して、現在花卉園には、ユンボの音が響いています。苗木も吉野桜だけでなく、少し変わった種類も入れてもらうことにしました。寄付をしてくれた方の名前を一字いただいて、その広場の名称に入れようと予定しているところです。工事は急ピッチで進んでおり、良い天候が続けば土も乾きますので、子供たちの歓声が一日も早く響き渡ることを、楽しみにしているところです。

23年度さくらんぼ園は、登園日が火曜日と金曜日の週2回となります。その曜日以外の日は、自然活動の拠点としてさくら幼稚園児が移動教室として利用したり、みどりご園の散歩コースとなったり、更には幼稚園開放日やふれあい広場にも活用しようと計画しています。さくらんぼ園からはピオトープも近いので、季節感あふれるさまざまな体験や遊びが活発にできるように環境整備を進めているところです。

整備を進めているところです。

さて、サッカー日本代表のアジアカップ優勝は、久々に日本中が沸いたニュースでした。その決勝点をアシストして、インテル・ミラノでの活躍を期待されている長友選手に関する興味ある記事を見つけたのでご紹介いたします。

さくら幼稚園やみどりご園では、毎日のサントレで「腰骨を立てる」ということを重視しています。白樺のポーズまではいかなくても、子供たちが背筋をピッと伸ばしている立姿や姿勢は見る側の心までシャンとしてくれます。また、和太鼓を打つ姿勢は、股割とも言いますが、たしかに骨盤を意識しないと力強い音は打てませんし、格好もよくありません。和太鼓が上手になるには、基本の姿勢がしっかりと取れるようにならないと上達しません。今、ひなまつり会に向けて踊りの練習もしていますが、ちゃんと腰を落とすことや中腰の姿勢、正座をして背筋を伸ばすことを繰り返して教えています。幼児期教育は体験を通して根を張ってあげる大切な時期... 今後、学童期・青年期にどんな幹を伸ばしていくのか楽しみです。

日本経済新聞

2011年(平成23年)2月4日(金曜日) 傍線筆者

サッカーの日本代表でこのほど、イタリアのインテル・ミラノへ移籍した長友佑都(24)は「太鼓の達人」で知られる。明大入学後は故障がちでレギュラーどころかベンチにも入れず、大勢の補欠部員とスタンドで応援に回り、ドラムをたたいていた。

アナザービュー (武智 幸徳)

長友が刻むリズムは余りにも力強く歯切れが良かったために、瞬く間に東京・西が丘サッカー場の名物になったという。わびしいスタンドでドラムを下カドカ鳴らしていた少年が今は世界チャンピオンのクラブにいる。「猿」から「太閤」に上

太鼓の達人の立身出世

り詰めた豊臣秀吉も真っ青の、痛快な立身出世物語ではないか。ボールの争奪戦で外国人選手に一步も引けを取らない長友には太鼓にまつわるこんなエピソードもある。前日本代表監督の岡田武史氏は日本選手の球際の強さを上げたいと考えていた。それでワールドカップ(W杯)南アフリカ大会の出場が決まると、選手に体幹トレーニングを課すようになった。熱心に取り組んだのが長友だった。体幹を強くすることと並行して「骨盤を立てる」ことにも選手にトライさせた。スポーツにおいて腰はすべての運動の中心。その腰をうまく動かせるかどうかは骨盤の使い方と密接につながっているからだ。通常、人間の骨盤は直立状態では前傾しているという。日本人の場合、特にその傾向は強い。それを起こすために体操の世界で「白樺(しらば)のポーズ」(両かかとをつけたまま、つま先を外に開いて立つ)と呼ばれている姿勢をとらせる。最初からできたのが長友だった。不思議に思った岡田氏は長友から子供のころ、和太鼓を習っていたと聞かされた。旧知の和太鼓奏者に「和太鼓も骨盤を立てないとたげない。そこが一番鍛えられるところ」と聞かされ得心がいったという。ブラジルのロナウジーニョは日本のCMでドラムをたたいて見せた。ブラジルは客席のサンパ隊が刻むビートとともに攻め込んでくる。打楽器とサッカーは相性がいいのかもしれない。長友のプレーもだんだんよくなる法華の太鼓という言葉を連想させる。尻上がりのプレーが限界を超えて果てしなく続きそうなのだ。このままずっと鳴り続けてほしいものである。